

自己愛の機能的側面と適応の諸相についての検討

立命館大学大学院応用人間科学研究科
対人援助学領域 発達・福祉臨床クラスター
渡邊 卓也

青年期は、一般に自己愛傾向が高まる発達段階と論じられている。本研究では、過敏特性および誇大特性から構成される自己愛の2つの下位特性について、その機能的側面が自己についての認識、および他者との関係性についての認識などの個人内要因を規定し、適応の諸相に影響を与えるものと考え、その関連性の構造を検討した。

大学生を対象に質問紙調査を実施し、222名（男性100名、女性122名）を分析の対象とした。平均年齢は19.71歳（SD=2.22）であった。探索的因子分析および主成分分析により各尺度の構造を明らかにし、パス解析により各特性の関連構造について検討した。その結果、自己愛の2つの下位特性は、“自尊感情”と密接に関連することが明らかとなった。また、その過程において、過敏特性を構成する下位特性である“過剰な他者意識”、“内向性”、“批判への脆弱性”は、対象希求性を反映し、“見捨てられ不安”を媒介することが明らかとなったが、“内向性”は、“親密性の回避”とも関連し、他者との関係性について、接近と回避の意識が混在する両価的な愛着スタイルを規定する要因となることが明らかとなった。一方、誇大特性を構成する下位尺度である“自己誇大感”は、他者との関係性について、特定の認識を規定しないことが明らかとなった。こうした結果により、過敏特性の機能的側面は、他者依存的に自己を規定し、誇大特性の機能的側面は、自己注目的に自己を規定することが示唆された。

さらに、こうした個人内要因を媒介し、適応の諸相を規定する構造が明らかとなった。過敏特性の機能的側面は、“主観的幸福感”の低下を助長し、また、過敏特性の高揚は、対人ストレスコーピングにおいて、“ネガティブ関係コーピング”の選択傾向、“解決先送りコーピング”、“ポジティブ関係コーピング”の非選択傾向と関連することが明らかとなった。一方、誇大特性の機能的側面は、“主観的幸福感”の高揚を助長することが明らかとなった。こうした結果により、過敏特性の機能的側面は、対人ストレスへのとらわれや消極的な対処行動の選択傾向と関連し、自己についての否定的な感情やその外部要因を対人的相互作用により統制しようと試みる動機が乏しく、サポート希求の表現や具体的な対処行動の産出が困難な状況にあることが示唆された。

以上のことから、青年期における適応の諸相を考える上では、他者への接近と回避が混在する両価的な心性や自己愛の機能的側面が規定する自己モデルを考慮し、有効かつ適切な支援の方法を模索することの有用性が示唆された。